

小さき者たち「古事記」より

神野麻郎

なんととっても円座の中心にいて皆に一目置かれているのは少彦名の神である。なにしろかの大国主の神といっしょに国作りをしたというさんぜんたる事績はあまねく知れわたっているのだから。両神による国作りがうまくいかなかったら、その後の歴史もまるで変わり、今のような国にはなっていないのだから。

ただ少彦名の神はいたって小柄で、小さき者たちばかりが集まっている円座の中でもひとときわ小さい。神話のとおりに蛾の皮の服を着て紡錘形のガガイモの実の中に坐っている。ここは常世の国、その海辺に口を開けた洞窟。目の前にはおだやかに波がうち寄せ、沖には真つ青な海原が広がっている。明るい陽射しの中を白や黒の海鳥がさかんに飛んでいるが、船は一隻も見えない。

初めは洞窟の中で皆がてんでに口々にしゃべっていたものだから、洞窟がワンワン鳴り続けるばかりでなにがなにやらわからなかった。そのうち、こんなでははじまらない、やはりだれかを司会にして進めたらどうかという意見が出て、そうだ、そうしようともまった。1では司会には誰が適任かと皆がたがいの顔を見合わせた、神様然とした少彦名の神はちよつと別格なので顧問として上にいただくことにして、情報通で弁舌もさわやかだということで、案山子のクエ彦に司会は決まった。

「えー、では」と、田んぼでよく見かけるようにちよつと傾いて立って、クエ彦がまず視線を向けたのは、なぜか洞窟の入口にたくさん生えている山ぶどうや竹むらのほうだった。竹むらの中には筍がさわさわと群生している。そのそばには桃の木が一本立ち、緑の葉むらの中に頬を染めたような実が三つ、垂れ下がっている。

「皆さん、どうしてここに山ぶどうや筍や桃の木が生えているかご存じですか？ ふしぎでしょう。それにはねえ、こんな古ーいいわれがあるんですよ」とクエ彦がちよつと得意げに語りはじめた。

「われらの始祖がイザナキ・イザナミの神であることは皆さんもよくご存じでしょう。この父母の神こそ、天から降ってきてオノゴロ島で結婚して大八島国を生み、その地上を満たすべく、山や野や海や風や、さまざまな神々を生んでくださったのです。ところが最後に母の神イザナミは、火の神カグツチを生んだので下腹が焼けただれて死んでしまい、黄泉の国へ去ってしまいました。夫のイザナキの神は恋しくてたまらず、そこで地下の黄泉の国まで追いかけていったのですが、真つ暗な中で一つ火を灯して見たところが、わが最愛の妻の死体

には至るところ雷神や蛆虫がうじゃうじゃ、そこで百年の恋もいっぺんに醒めてしまい、すたこらさつき、逃げだした」

笑っていいところかどうかはわからなかったが、それでも抑えきれずに皆が笑った。

「怒ったイザナミの神が家来の醜女たちに追いかけさせる。さあ大変、でもイザナキの神はちよつと知恵を出して、頭に巻いていたつる草の髪飾りを投げたところが、なんとつる草にぼこぼこ山ぶどうの実が成りました。醜女たちがそれを拾って食べている間に逃げました」

皆が大笑いした。入口の山ぶどうの実もわさわさと揺れた。

「でも醜女たちはなおも追って来る。イザナキの神は今度は頭にさしていた竹櫛の齒を引っかき引っかき投げました。するとそれが一々ぼこぼこ筍になりました」

皆の高笑いに挨拶するように、筍がいつせいに頭を振った。

「醜女たちがそれを食べている間にまた逃げた。なおその次にも雷神やら兵士やらが追いかけてきたが、イザナキの神はふと黄泉ツヒラ坂の坂下に桃の木が生えているのに気がついてその実を三つちぎって投げた」

桃の実が風鈴のようにゆらゆら揺れた。

「すると桃の実は魔よけの効能があるものだから、雷神や兵士はいつせいに退散した。それでようやくイザナキの神は地上に帰ることができた。そういういわれがあります。だから彼らは今日この集会に来てくれているわけです」

山ぶどうの実と筍と桃の実がいつせいに揺れた。

「さてさて私が口火を切って座もなごんだようですので、今からは皆さんにお一方ずつ語っていただきます。ここに集まっておられるのは、皆さん濃い薄いはあってもご縁で結ばれている小さい方たちばかりです。ではまず、その兎さんから」

白兎がひょうきんにその場でびよんぴよんと跳びはね、一巡り。

「ではボクから。えー、皆さん、八俣の大蛇の話は有名なのでご存じでしょう。高天の原から出雲の国に降ったスサノオの命が、住民を苦しめていた頭が八つ、尻尾も八つの長大な八俣の大蛇をみごとに退治してクシナダ姫と結婚したというあれですね。

さっきのクエ彦さんのお話とつながりますと、イザナキ・イザナミの神がたくさん神を生んだ、その中の一柱がスサノオの命です。天照大御神の弟というふうになっているけれども、もともとは出雲の祖神様で、根の国に行ってお住みになりました。そのスサノオの命の子供のそのまた子供のそのまた子供の……早い話が六世の子孫が大ナムヂの命、後の大国主の神で、ボクはその大国主の神に縁が深いのです。

もともとね、ボクは隠岐の島に住んでいたんですよ。ええ、日本海に浮かんでいるあの隠岐の島です。島からは薄青く大倭豊秋づ島、つまり本土のほうが見えます。くり返しくり返し見ているとね、そのうちそこに渡りたくて渡りたくてしようがなくなってきました。

皆さんもそんな経験、ありませんか？」

うなずく者もいたし、うなずかない者もいた。

「そこでボクは一計を案じました。海岸に出て、ちようど泳いでいたワニ鮫の一匹を呼び止めて、「君らの仲間とボクらの仲間はいつたいどっちの数が多いだろう。ひとつ競争しようじゃないか」と持ちかけたんです。ちよつと知恵の足りない鮫は、「そりゃあワシらに決まっとるわい」とすぐに話に乗ってきて仲間を呼び集めました。そこで鮫たちに、本土の気多の岬のほうまでずらつと一列に並んでもらいました。足もとから沖の方までずらつと鮫、鮫ですから、その景色たるや、この世の開闢以来の見ものでしたよ。

ボクは彼らの頭をぴよんぴよん踏み越えながら一匹ずつ数えていきました。しめしめです。そしてどうとう後一步で、あこがれの本土の陸地に跳び上がれるという段になって……あれはボクの一世代の油断、大失敗で、今でもトラウマになっているのですが、「ワイイ、おまえたちを騙してやったよ、ぼくはここに渡りたかっただけなんだ、おまえたちは大馬鹿だなー」とやってしまったのです。最後の一匹がそれを聞いて、とっさにボクの足に噛みつきました。あの鋭いぎざぎざのこぎり歯です、たまったものではありません。ボクはすっかり毛皮をむかれてまる裸になってしまいました。子供たちの歌にも「皮をむかれて赤裸」とあるとおり」

「かわいそう」とか、「痛そう」という声が少し洩れた。「惜しい。陸地を踏むまで、もうちよつと辛抱してたらなあ」と誰かがいった。クエ彦が、

「白兔さんはなかなか頭がいい。知恵を働かせたけど、でも「そうは問屋がおろさない」、いや、「百里を歩く者は九十を半ばとす」というところでしょうか。噛みついた鮫の気持ちもわからないではない。それにしても赤裸とは、災難でしたねえ。それでどうなりました?」「はい。情けないことですが、ボクは気多の岬に寝ころんで、あまりの痛さにうー、うー唸っているしかありませんでした。そこへドタドタとさわがしく土煙をたててやって来る者たちがあります。出雲の方から来た兄弟の神々のようでした。ボクの惨状を見たその神々は、こう教えてくれたんです。「おまえはまずこの潮水を身体に浴びろ。それから風に当たってればだいじょうぶ、治るぞ」。そのとおりにしたところ、治るところか肌がひび割れて痛みは倍増、もうたまりません。」「どうしてだ? ああ、ああ、ボクはあいづらに騙されのか!」と腹を立てましたが後の祭り、伏せて泣いているしかありません。

すると、たくさん袋を負わされた神がだいぶ遅れてやってきて、どうしたのだと声をかけてくれました。またこいつも騙すつもりだろうと赤目を剥いてやりましたが、見ればその神は実直そうな顔をしています。そこでわけをすっかり話したところ、その神は前の神々とはちがって、親切にこう教えてくれたのです。「潮水を浴びて風に当たるなんて、さかさまだ。まず川口に行つて真水で身体をよく洗いなさい。それからそこらに生えている蒲の黄色い花粉を取つて敷いてその上でころころ転がりなさい。そうすればかならず治るよ」。そのと

おりにしたところ、ほんとうに痛みも消え、肌もすっかり元どおりにになりました。

聞けば先の兄弟の神々もその大ナムヂという名前の神も、因幡の八上姫やかみに競って求婚に行く途中だとのこと、だからボクは恩返しにいつてやったのです。「だいじょうぶ、八上姫はあなたの兄弟なんかのいうことは聞きませんよ。かならずあなたのいうことを聞いてあなたと結婚しますよ」。皆さん、ボクの耳はこんなに大きいでしょう。だからボクにはだいぶ先の音が聞こえるし、予言の力もあるのです。そしてじっさい、ボクのいうとおりになつたのですよ。

そして大ナムヂの命は、皆さんも知つてのとおり、後々大国主の神になって少彦名さんと協力して国作りの大仕事を立派になさいましたね。だからボクは耳も長いのですが鼻も高いのです。あの大神に助けてもらったのだし、またボクも少しお助けすることができたのですからね。チントンピョン」

兎が話し終えると、皆は口ではやしたり手をたたいたりした。クエ彦も手をたたきながら、「因幡の白兎さんでした。いいお話でしたね。もし兎さんに出会わなかったら、それからの大国主の神の生き方もだいぶちがったものになったかもしれないですね。兎さんは小さなようで大きな仕事をなさつたのではないのでしょうか。私はそう思いますよ。さて、次は……」

兎のそばで鼠がすぐチューと一声鳴きながら小さな手を元氣よくあげた。

「大ナムヂの命の話が出ましたから、ボクも」

ちよつと甲高い声だ。

「そうですね。順番からいって鼠さんになりますね。はい、どうぞ」とクエ彦。

「はい、ありがとう。ボクはもともと根の国にいた鼠なんです、ボクも大ナムヂの命をちよつとお助けしたことがあるんです。

それはこういうわけです。兎さんの話の続きになりますが、たしかに因幡の八上姫は大ナムヂの命の兄弟の神たち、八十神やそかみというんですが、八十神たちの求婚を断つて「私は絶対大ナムヂの命様に嫁ぎます」と氣丈に宣言しました。それを聞いた八十神は悔しがり怒り狂つて大ナムヂの命を殺しにかかりました。そして二回も殺されてしまったのですが、そのたびに祖神おやがみの神ムスヒかむの神や母神の助けで生き返ります。このままではほんとに殺されてしまふというので、母神が紀ノ國に逃がしました。さらにその神が木の股をくぐらせてササノオの命がいらっしゃる根の国に逃がしたのです。こうして大ナムヂの命は、地上の中つ国からボクの住んでいた地下の根の国にやって来られたのです。

その根の国ではまずササノオの命の娘のスセリ姫びめと出会いました。美男と美女、たちまち二柱はおたがい一目ぼれ、意気投合、なんとその場で結婚までしてしまいました。すばやいですね。大ナムヂの命はずいぶん女神にもてたんですよ。ああ、うらやましい」

クエ彦がうなずいて、

「そのとおりですよ、鼠さん。後のことですが、命みことは美女の誉れ高かつた越こしのヌナ河姫と

も結婚なさいました。ほかにもたくさんのお姫様たちと結婚したので子神もどんどん生まれ、その数なんと百八十柱といわれていますね。親神にもたくさんのお女神たちにも愛され、子孫も大いに栄えた大ナムチの命は果報者です。それだけの魅力や能力を備えた神様だったのでしょう。今に至っても日本の国では、世に八百万やおよそもいらつしやるといふ神々の中で、まず一番二番を争う人気の神様でしょう。すごいですね。あれあれ、鼠さん、司会のくせにあなたのお話の腰を折ってしまつてまことにすみません。どうぞ続きを」

「はい、どうもどうも。どうなることかと思つて聞いていましたよクエ彦さん。さてスセリ姫ですが、夫になつた大ナムチの命をすぐ父親のスサノオの命に紹介したんです。すると一筋縄ではいかない猛者のスサノオの命、大事な娘の婿になろうとして大ナムチの命を、こいついつたいなにほどの男なんじゃ、とかさにかかつて試されます。まず蛇がうじゃうじやいる室屋むろやに入れて寝かせました」

洞窟の奥のほうの暗がり、しゆるしゆるとたくさん這う音がしたので、鼠も白兔もびくつとした。クエ彦が、

「皆さん大丈夫ですよ。彼らももうこの常世の国の仲間なんです、皆さんを襲つたりはしません。彼らも昔、自分の役割を果たして神々を盛り立てたわけで、今はその話を聞いてなつかしがっているんですよ。さあ鼠さん」

「そうでしたね。ボクはちよつとぞくつとしましたよ。なにしろ根の国ではボクらの天敵でしたからね。さて大ナムチの命ですが、その危機は、スセリ姫がくれた蛇を追い払う領巾ひれを振つて助かりました。その次は百足と蜂がうじゃうじやいる室屋に入れられましたが、それも同じようにして助かったのです」

やっぱり洞窟の奥のほうから、不気味にごそごそ這う音やぶんぶん飛ぶ音が聞こえてきた。

「だいじょうぶ？ いやだいじょうぶですね。さていよいよボクが登場するのはその次のシーンです。えへん。」

スサノオの命は次に大弓をこなわせて大空に向けて矢を放ちました。矢はヒューンと音を立て、大きな弧を描いて野原の真ん中に突き刺さりました。そうしておいてスサノオの命は、その矢を取つてこいと大ナムチの命に命じました。いわれたとおりに命が野中に入つていきますと、スサノオの命はすかさず野原のぐるりに火をつけました。たちまち激しい赤い炎が立つて、大ナムチの命は火の輪に取り囲まれてしまいました。ちつとも隙間がないのでそこから出ることはできず、燃え盛る火は四方八方からどんどん迫ってきます。

そこでですよ、ボクが穴からするつと出ていったのは。さすがに苦悶の表情で焦っている命に向かつて、「内はほらほら、外とはすぶすぶ」と教えました。「内はほらほら、外はすぶすぶ」、ちよつとなぞかけみたいですが、土の中にはほら穴があるよ、外にいたら燃やされちまうよ、という意味です。今でもこのフレーズ、気に入ってますねえ、「内はほらほら、

外はずぶずぶ」。いいでしょう？ 土の中のことは、なんといってもボクらがよく知っていますからねえ。頭のよい大ナムヂの命、すぐに意味がわかって大きな足でどんと地面を強く踏みとほら穴が現れたのでさっとそこに身を隠しました。その直後、猛火が地面をなめて通りすぎました。命は火傷一つ負うこともなく助かったのです。

それからボクはちよつと得意顔で、大ナムヂの命が探していた矢をくわえて行って、命にさし出しました。命はススに汚れたお顔で嬉しそうに受け取りましたが、その矢を見てこんどはこらえきれずに大笑い。どうしてかという、はしこいボクの子供たちがですね、矢の羽をぜんぶ食ってしまったんですよ。ボクはもう恥ずかしくて恥ずかしくて、顔から火が出ました」

聞いている皆はワッハッハ、オッホッホ。

「それで、命はその矢を持って行ってスサノオの命に渡しました。その後も命はスセリ姫の助けで、スサノオの命が執拗に与える試練をしのいで、結局スセリ姫を連れて首尾よく地上世界へ帰っていきました。聞くところによると、その後大ナムヂの命はスサノオの命から授かった太刀と弓矢で、先に自分を殺そうとした兄弟の八十神たちをこてんぱんにやつけたそうです。またスサノオの命からは、「大国主の神」という最高の名前ももらったそうです。ボクの話はこれでおしまい、チュー」

クエ彦が、

「はらはらする、またお腹もかかえてしまう楽しいお話でした。もしも鼠さんの助けがなかったら、大ナムヂの命はあえなく根の国で焼け死んでいたでしょうね。そうすると後の歴史はすっかり変わってしまいましたね。鼠さんも、そんなに小さいのに大きな働きをなさいました。ご立派、ご立派。おみごと、おみごと。皆さん、どうぞ拍手を。……さてさて、そうすると次は……谷グクさんの番になりますか？　すると私の出番も近いですね」

谷グクとはヒキガエルのことである。前脚をつけて行儀よく坐っていた谷グクがびよんと一歩前に跳ね出た。そして低めのボイスで話しはじめた。

「ボクの話は短いですよ。そしてボクも兔さんや鼠さんと同じように、大国主の神を少し、ほんの少しだけですがお助けしました。えー、鼠さんの話につなげますとね、大国主の神はその後出雲の国でたくさん結婚をしてたくさん子供の神をつくって満ち足りて暮らされました。

ある時その神が、家来の神々を連れて三保の岬におでかけになったんです。そこは、出雲の国の北東の端っこにある、広い海原に突き出た岬です。有名な大国主の神見たさに、近くの田んぼにいたボクも仲間たちといっしょにそこに出かけました。びよんびよん跳びはねすぎて、だいぶ疲れてしまったのですがね。

岬の端でようやく神の一行に追いつきました。大国主の神は威風堂々たるお姿、すつくと立って沖のほうを眺めていらっしやいます。ボクもそちらを眺めましたが青波白波のほか

は何も見えませんが、でもずっと見てみると、初めは茶色の点のようだったなにかが波の穂を伝って近づいてくるのです。それは珍しいことに、ガガイモの実を割って作った小舟でした。そこに誰かが乗っています。だんだん見えてきたのは、蛾の皮を着物にしている風変わりな、小さな小さな神様でした。

少彦名さん、ここからはあなた様に語っていただくのがいいのかもしれないんですが、ここまでボクの見たままに話してきた手前、このままもう少し続けてもかまいませんか？」

少彦名の神がこくんとうなずいた。

「ありがとうございます。小舟が目の前まで波に運ばれてきた時、大国主の神はふしぎがられて、「君はいつたい誰なんだ？」と尋ねられました。でも蛾の皮の主は黙っています。そこで家来の神たちに、「この神を知っているか？」と尋ねられましたが、皆、「いいえ、知りません」と首を横に振るばかり。そこでそのようすを見ていたボクがたまらずしゃしゃり出て、「あのう、田んぼのクエ彦さんだったら、その神様が誰だか、きつと知っていますよ」と神に申し上げました。「ほんとうか？」。「はい、ほんとうです」。ええええ、皆さん、そのクエ彦さんとは、誰であろう、今司会をしてくださっているこちらのクエ彦さんですよ」クエ彦はにこにこ笑っている。

「ふだんは田んぼに立ちっぱなしのクエ彦さんは、皆さん知つてのとおり、足こそ不自由だけれどその分目と耳と頭をフルに使われるので、誰よりも世の中のことに通じています。ボクも日ごろクエ彦さんからいろいろ教えてもらっているのです。ご本人がいらっしゃるのだから、ボクの話はここまで。ゲーログゲロ」

クエ彦がえへん、とか、ふん、とか聞こえる空咳を一つした。

「谷グク君、ありがとうございます。君にはずつと感謝してるよ。君がそういつてくれなければ、私は大国主の神に召されることもなかったわけだから。」

さて皆さん、私は大国主の神に召されて、「この蛾の皮の主は誰か知っているか？」と訊かれました。私は、「はい、もちろん知っています」と答えました。「これは神ムスヒの神のお子さんの少彦名の神でいらっしゃいますよ」とね。それ皆さん、もちろん少彦名は今ここにおいでになる、そちらの神様ですよ」

少彦名の神がまたこくんとうなずいた。

「神ムスヒの神は国つ神にとつての御祖の神、高天の原におられながらいつも地上世界のことを気にかけてくださっています。大国主の神も窮地に陥った時、この御祖の神に救われたことがあります。大国主の神はすぐさま少彦名の神を伴って、天に昇って御祖の神のもとにいらつしやいました。」

さてここからは、ぜひとも少彦名さんにお語りいただかなければ。どうぞお願いします」小さいながらに重々しく、ガガイモの実の中に立って少彦名の神が語りはじめた。

「クエ彦さん、司会、ご苦労様じゃ。」

そうさな、私も齢をとったので、昔のことはもうたいてい忘れてしまいたが、その折のことだけはさすがにはつきり憶えておるよ。大国主の神といつしよに久しぶりに高天の原に上つて神ムスヒの神のもとに至った。大国主は恭しく札をしてから、「御祖の神様、今日は一つお伺いに参上しました。私のそばにいるこの神は、御祖の神様のお子さんですか？」と尋ねられた。それで御祖の神は私のほうをじっと見つめられた。じつはな、その時私はだいぶ不安だったんじゃないよ。というのも、御祖の神は子たくさんじゃ。私は遠い昔にお別れしたきりで長い間お会いしていなかったものだから、もう私のことなんかはすっかりお忘れなのではないかと冷や汗をかいていたんじゃないよ。ところが、さすがに御祖の神じゃ、すぐにこうおっしゃった。「おお、これはまちがいないわが子ですよ、大国主。私のたくさんの子供たちの中で、昔、私の手の指の間から漏れ落ちて行方知れずになってしまった子供です。海のかなたの遠い常世とこよの国に行っているとは聞いておりましたが、無事だったのですね。おお、おお、いとしいわが子よ」。そして私を両の掌に抱き取って包み、涙を流された。なつかしい母のにおいがして、私もオンオン泣いたよ」

誰かが鼻をすすった。クエ彦が、

「親子の再会、感動的な場面ですね……。それからどうなりましたか？」

「おお。御祖の神は私にこんなふうにやさしく声をかけられたのじゃ。「少彦名よ、この大国主の神はこれから中つ国の国作りを始められる。困難な、苦勞の多い大事業です。そなたは今から大国主の兄弟となり、常世でたっぷり蓄えたおまえの力を使って国作りの大事業をお助けなさい」。私は御祖の神の温かい掌の中でこくりとうなずいた。

それから中つ国に戻って、大国主の神と協力して国作りに励んだ。地上世界も東西南北に広いので長い時間を要したよ。その国作りのことは、もうくたくたしいので端折らせてもらうが、国作りがおおよそ終わると、私はまたこのカガミの舟に乗ってこの常世の国に戻ってきたのじゃ」

クエ彦が、

「国作りは地上のあらゆるモノたちの過去現在未来にかかわる大業でした。それがどんなようすだったのかというところを、もう少しお話しいただけませんか？」

「うむ。イザナキ・イザナミの神がお産みになり、山川草木・鳥獸などで満たされたあの葦原の中つ国は、出雲の国はともかく、まだまだ各地方に荒ぶる神たちが満ち満ちてざわざわしていた。われらはいつしよに各地方を次々にめぐってそれらの神たちを、あるいは言葉で従え、あるいは力で討つていった。それであの「豊葦原とよあしはらの千秋ちあきの長五百秋ながいおあきの瑞穂みずほの国」、つまり葦の豊かに茂る原の、永遠にみずみずしい稲穂の稔る国ができあがったのじゃよ。こんなふうにもいえるな。中つ国の今どきの言葉でいえば、まあ大国主はハードウェア担当、私はソフトウェア担当。大きな大国主が力で国土を整えていった。小さな私はその微妙微細な部分を整えて豊かに仕上げた。そこで暮らすあまたの青人草あおひとくさにも、苦しみを除き幸福

を与えていったんじや。たとえば青人草にうま酒の作り方や病を治す法を教えてやったよ」
クエ彦が、

「少彦名さんは、仏教のほうでいえば薬師仏のようなこともなさったのですね。あなた様はすべての小さき者たちの代表です。あなた様がいなければ国作りは完成しませんでした。

ありがとうございました。当事者から国作りの貴重な証言をいただきました。さて、あとは、と。その雉たけしさん、そんなふうには後ずさりせず、あなたも語ってくださいよ」

雉はメスで、ベージュ色の身体は岩だらけの洞窟の中では目立たなかったが、よく見ると羽や身体の様子は凝っていてきれいだった。かわいらしい黒目をくりくりさせて、

「いえいえ、私は皆さんのように大神を助けるなんて立派な仕事なんかぜんぜんしなかったので、恥ずかしくて」

「いや、雉さん、私たちはべつに立派とかなんとかではなく、あの神々の時代にそれぞれがどういう体験をしたのか、その話をしているのです。その時代には大きい者たちの陰に隠れて目立たないけれども、小さき者たちにもそれぞれの役割があった、その話が聞いておもしろいのですよ。時に大きい者たちの話よりもおもしろい。だから、さあ、遠慮なさらず」
「クエ彦さんがそうおっしゃるのなら」と雉は長い尾羽をうち振った。

「私はね、鳴女なみよめという名前なんです。皆さん今まで大国主の神の話をなさっていました、私もたった一度だけ神のお姿を拝見したことがあるんですよ。じつは私、これでもともと地上ではなく根の国でもなく、高天の原に住んでいたのよ。そこでなに不自由なく、幸せに暮らしていたんです。それがある時、急に天つ神たちに呼び出されたの。伺いますと、驚いたことに最高神の天照大御神と高御たかみムスヒの神の御前でした。縮こまってひれ伏しておりますと、大神たちは私にこんな話をなさったの。じつは今から八年も前に大変大事な用向きで天あめの若日子わかひこを中つ国に遣わしたのだが、戻ってこないのだ。おまえは天の若日子の所まで飛び降りて行って、こんなふうには伝えよ。「そなたを葦原の中つ国に遣わしたのは、その国の荒ぶる神たちを説得して従わせるためだ。それなのにどうして八年経っても復命しないのか」、こう一言一句正確に伝えなさい。いいな。

それで私、すぐに雲をかき分けかき分け、まっすぐ出雲の国に降りましたの。空の上から見たいちばん大きなお屋敷の屋根に止まるとね、ちょうど広い庭をたくさん家来を連れてた貴い方が歩いておられました。それこそが、高天の原でもうわざでもちきりの大国主の神だとはすぐにわかりましたよ。私、そのままずっと拝見していたかったのですが、あまり寄り道もできませんので飛び立って、他の鳥たちに尋ねながら天の若日子さんの家を探して、門のそばに立っていた桂の木の枝に止まったんです。それは立派なお屋敷で、なんと若日子さんは大国主の神の娘の美しい下照姫したてひめさんを奥さんにもらって暮らしておられるのです。でも、いや若日子はあんなふうには大国主の神に取り入ってゆくゆくは葦原の中つ国をわがものにしようとしているのだ、という鳥もおりましたよ。でもそんなことはどうであれ、私

は大事な使者の役目を果たさねばと思つて、しきりに鳴きましたの。ふしぎに思った若日子さんが庭に出てきました。ほればれするような、若々しくお美しい方でしたわ。私は少し興奮しながら、その方に向かつて天つ神からいわれた言葉を一言一句まちがわれないように鳴きましたの。

ところが、ですよ。ああ、これで気の張る使者の役目は終わったと安堵していますと、若日子さんのそばにいた、あのいかにもずるそうな顔の天の探女あめさぐめが、若日子さんに告げているではありませんか。「あの鳥、すごく悪い、嫌いな鳴き声だわ。若日子さん、射殺いころしてしまいなさいよ」。探女は私のいうことがすぐにわかったようですが、若日子さんにはわからなかったようです。若日子さんはすぐに、かつて天つ神に授かった聖なる弓で聖なる矢を放つて、私、あつけなく殺されてしまいましたの」

エーッと、そここで悲鳴が上がった。跳びあがった因幡の白兔が、

「殺されたとはなんと。鳴女さんはいわれた役目を果たしただけじゃないですか、なにも殺すことはないでしょう。若日子さんはひどい、それ以上に、若日子さんをそそのかした探女が悪い」

「まあでも、そんなふうになるのが私の宿命だったのですわ。その後のことも聞きたい？」

円座の皆がうなずいた。

「後から聞いた話なんですけれども、若日子さんが放ったその矢は私の胸を貫通して、ふしぎやふしぎ、どんどん青空をまっすぐ上つていって、高天の原との境の岩床をも突き抜けて、天の安の河原やすにいらつしやつた天照大御神と高御ムスヒの大神のもとにほとりと落ちました。見ればまぎれもなく両神が八年前に天の若日子に与えた矢で、羽には血のりがついています。そこで高御ムスヒの神が、矢を握ってこんなふうにいわれました。「この矢が悪しき神を射たのだったら、天の若日子に当るな。そうではなく、もし若日子に邪心があるのなら、若日子に突き刺され！」。そして矢をさつき開いた穴から突き返しました。矢はまっすぐ飛び下つて、朝寝をしていた天の若日子さんの胸に当つて、あつけなく死んでしまわれたの」

座は一瞬静まったが、谷グクが、

「鳴女さんはどうなったのですか？ 死んだまま？」

「ええ、死んだまま」

「鳴女さんは使いで飛び出て、戻らなかった。ああそうか、それで世の中では行って戻らないことを「雉かかしのひた使い」というのですね？ 鳴女さんがそのもとなんですか？」

「ええ、谷グクさん、それはそうなんですわ、でも皆さんに聞いていただいたとおり、私は怠けて戻らなかつたわけではなくて殺されたので戻れなかつたのですよ。そのことわざ、私としてはいつもそこが残念ですわ。ジージー」

「いやあ、おもしろい、といつては語弊がありますが、とてもドラマティックなお話でした」とクエ彦がその話を結んだ時、外でヒューンと音がした。皆がいつせいに見やると、日を受

けて輝く一本の矢がものすごいスピードで虚空をまっすぐに上っていった。

洞窟は海のそばで、一部には岩の割れ目に溝のようになっていて海水が侵入している。その浅い所の岩に止まって、全身赤っぽいぶつぶつした皮膚の大海鼠なまこが一匹、のどかに口を開いたりすぼめたりしていた。クエ彦がうつむいてその海鼠に呼びかけた。

「次はあなたにお願いしますよ、海鼠さん。あなたの口がどうしてそんなふうになったのか、皆さん聞きたがっていますよ」

海鼠はいったん浮き上がったが、沈み、また浮き上がってきた。皆は目も耳もありそうにない海鼠がしゃべれるのかどうかと、ちよつと心配したが、意外にも子供っぽい、明るい声が返ってきた。

「聞けば、雉の鳴女さんは立派な仕事をなさったじゃないですか。天つ神の使者なんてかっこいいですよ。ボクなんか、昔から今までみんなに嗤われどおしですよ。ああ恥ずかしい」
「そんなことはないですよ、海鼠さん。私はあなたが出てくるあの話は好きですよ。あの時のあなたの心境を一度伺ってみたいと思っていました。今日はその絶好の機会。あなたが出てくるまでのところは、私からかいつまんで皆さんにお話ししましょう。」

天の若日子さんが亡くなったところまで、鳴女さんがお話してくださいました。その後のことですが、天つ神たちは中つ国の覇者の大国主という神はなかなか手強いというので、今度は誰よりも武に秀でた建御雷たけのみかみかみの神を降しました。大国主の神の子供の神との力競べなどいろいろありましたが、結局さしもの大国主の神も建御雷の神にはかなわず、中つ国を天つ神に譲ることを承諾させられました。そこで天照大御神の孫にあたるホノニニギの命が、伴の神たちをたくさん従えてにぎにぎしく九州の日向の高千穂の峰に降られたのです。

この辺まででよろしいですね、海鼠さん」

「はい、ご苦労さん」

海鼠はゆつくり水から這い上がって、あたりを濡らしながらぬめぬめ光っている平たい頭を一度下げた。

「では皆さん、ボクから。でもボクの話を嗤わないでください。いや、おかしいから笑うのはしようがないですが、笑っても嗤わないでください。ボクは今、人間の子供が蒲団におねしょをしてしまったて家族にばれるのがいやだなあと思っている、そんな心境ですよ。」

ホノニニギの命の従者の一柱に天あめのウズ女の命という方がおりました。皆さんもよくご存じのように、天の岩屋戸の前で裸踊りをして八百万の神を大笑いさせたあの神様ですよ。そんなことをやってのけるくらいで、パワーにあふれ、ずいぶん勝気な女神でした。

天孫降臨の成った後のことですが、その方が日向の海辺に出てきて、海に向かってこう呼ばわったのです。「聞け、皆の者！ 天つ神のご命令であるぞ。この海原に住んでいる魚たちは、大きいのも小さいのもすべてここに集まれ！」。天つ神の御子みこの降臨のことは海の中でもだんだん評判になっていましたが、海中まで響いたウズ女の命の声で、魚たちはいった

い何ごとかとその海辺に急ぎました。

たまたまボクはその海辺にいたので、浅瀬から成り行きを見まもっていたんです。「見まもる」って、皆さん、目のないボクがいうのはふしぎでしょうが、でも変ではないんです。ボクはこの全身の皮膚でものを見られるんですから。皮膚で振動も感じるから音も聞けるんです。

魚たちがだんだん集まってきて、しばらくすると岸辺から沖のほうまで見渡す限りの海は魚、魚、魚で埋めつくされました。皆さん、その風景、ちよつと想像してみてください。いやあ、あれは前代未聞、空前絶後の壮観でしたよ。いやあ、皆さん、ボクは海辺で暮らしていてもよく知らなかったのですがね、魚といっても種類も形も色もいろいろいるもんですねえ。大きいから小さいの、色の白いのから青いのから赤いの、細長いのからずんぐりしたの、薄っぺらいのから……」

「海鼠さん、海鼠さん。魚がいろいろいるのはわかりました。魚市場か魚屋に行けば一目でわかりますからね。それでどうなりました？」とクエ彦。

「はい、クエ彦さん。ボクの悪い癖でつい調子に乗りかけました、すみません。ウズ女の命はね、岩の上から広く見渡して両手を上げ、集まった魚たちにこう問いかけられたのです。

「おまえたちよ、もう知っていようか、この度かしこくも高天の原から天つ神の御子が高千穂の峰にお降りになった。そこでおまえたちに訊く。今後おまえたちは、この御子にお仕え申すや否や」。問いかけたといつてもずいぶん上から目線の詰問調で、承諾せねばこの場でただちにつかみ取って殺してやる、焼くか煮るかしておかずにしてやる、という勢いです。だから魚たちは皆、口々に「お仕え申しましょう」といって平伏したのです。強い鮫や大きな鯨までがそうしました。そのいっせいに発して空を満たした声の響きのものすごさといったら。

ボクはあつけにとられてそのようすを見聞きしていました。その時のボクの気持ちはこうです。ウズ女の命は魚たちに命じたのだから、魚でないボクたちは関係ないと。だから返事はしませんでした。

ところが、あろうことか、ウズ女の命が、あの猿田ビコの大神にも睨み勝ったという燃えるような目で、ほとんど足もと近くにいたボクを睨んだのです。そして怒鳴りました。「この口や、答えぬ口!」。いい終わらぬうちにボクはぎゅつとつかまれて、乱暴に紐小刀で口を切り裂かれました。あつという間でした。それ以来、ボクたちの口はこうして横に裂けてしまったというわけです」

聞いている皆の口からため息が洩れた。「それはひどい」、「かわいそう」という声も聞こえた。嗤い声など一つもなかった。クエ彦が、

「そうだったのですかあ。いや、私は海鼠さんに同情しますよ。とんだ災難でしたねえ。いくらパワフルだといっても、ウズ女の命はやり過ぎですね。もしかするとあなたは見せしめ

にされたのかもしれない。天つ神たちのよく使う手ですからね。皆があなたがたの口を見るたび、天つ神の威力を思い知るようにね」

「ありがとう、クエ彦さん、皆さん。ぼくの話はこれで終わり」

チャボンと水に入った海鼠のすぐそばを、大きな魚影がかすめた。クエ彦がそれに呼びかけた。

「鯛さん、鯛さん。ちょうどよかった、最後にあなたに語ってもらいましょう。もう皆がよく知っている話ですけれど、ご自身から聞くのはまた格別の味わいがありますからね」

大きな鯛は胸ビレを行儀よく岩につけて身体をささえながら、水の上に頭を突き出して口を開いた。さすがに魚類の王、その姿には風格があった。

「今までのお話はここで私も聞かせてもらいましたよ。皆さん、それぞれおもしろい話をありがとうございました。仲間のところへ帰ったら、早速聞かせてやりましょう。今さっきの海鼠さんの話は、私は母親から聞いたおぼえがあります。私の母もウズ女の命の召集に参加した口だったんですよ。」

さて私の話は、その少し後の事になります。ホノニニギの命と結婚した大山ツミの神の娘の木花咲このはなさく姫ひめは三柱の皇子を生まれました。長男が火照ほでりの命、別名海幸彦うみさちひこで、長じると毎日山で海原に出かけて誰よりも上手に漁をしました。末つ子が火ヲほりの命、別名山幸彦やまさちひこで、毎日山に出かけて誰よりも上手に弓矢で獣を獲りました。ある日、その火オりの命が、何を思ったか、火照の命に互いの道具を交換しようと申し出ました。兄はいやで、三度も断りました。でもなお弟がしつこくいうので、しかたなく火照の命も折れて、「ただし一日だけだぞ」といって道具を交換しました」

クエ彦が、

「そこなんです、鯛さん。どうして火オりの命はそんなにしつこく火照の命に道具の交換を迫ったんでしょうか？ 私にはそこがよくわからないですよ。毎日山の猟ばかりなので飽きてしまって、たまには広い海原に出たくなったのでしょうか？」

「さあ、それは私にもわかりませんが、私の母はこんなふうになってましたよ。それは火オりの命が豊玉姫とよたまひめに逢うためだって。火オりの命は海の神の娘に逢って結婚して子供をつくる必要があったんだって。私の母は魚の中では長生きで物知りでもあったんですよ。クエ彦さんには及びませんがね」

「そうですね。なるほどね。それで私もわかるような気がしますね。たしかに神々の話はよく、後のほうのできごとを説明するためにさかのぼって先のことを都合よく語るといふうに作られています。なるほど、後に火オりの命が豊玉姫に逢うためには、先に道具を交換する必要があった、多少強引にでも、というわけですね」

「ええ。それで火オりの命は喜んで兄の小舟を借りて海原に出て、竿を振り釣り糸を垂らしました。ところが何度やってみても一匹の魚さえ釣れません。山では誰も及ばない猟の達人

なのに、海ではすっかり勝手がちがったのですね。俗に「餅は餅屋、蛇の道は蛇」といいますから。

最後に釣り糸を垂らした時ですよ、私が喰いついてしまったのは。波のかけがゆらゆら揺れている海底の近くにうまそうなエビがひよこひよこ泳いでいるように見えたので、ついはくりとやったら、不覚にもそれが釣針のエサだったんですよ。すぐに釣り糸がピンと伸びて、私はだんだん引き上げられていきました。針が引っかかった喉の奥の痛いこと痛いこと。海面に近づくと小舟の上に竿を構えた誰か、というのはまだそれが火オリの命とは知らなかったものですから、その誰かの姿がゆらめいています。私をなんとか釣り上げようと、顔を鯛よりも真っ赤にして手足をふんばっています。しかしこちらも釣り上げられてはかなわない、渾身の力で身体をひるがえしてぐぐつと沈みこみました。すると釣り糸はぶつんと切れました。私は九死に一生を得たんです」

皆がほっとした顔をした。珍しく少彦名の神が口をはさんだ。

「もしその時そなたが釣り上げられていたら、その後の話はどうなっていたことか。海神の宮の話もなくなるわけだし、中つ国の歴史がすっかり変わってしまったな……想像するとちよつと恐ろしくなる。そなたがその時火オリの命に釣り上げられるかどうか、歴史の変わり目だったんじゃないや。だから歴史というのは、怖くもありおもしろくもある」

クエ彦が、

「なるほどおっしゃる通りですねえ。たった一度の釣りの結果が歴史を変えてしまうとは……。鯛さん、それからどうなりました？」

「私は、逃げられたのは幸いでしたが、でも喉の奥には釣針が刺さったまま、痛くて痛くてずつと苦しみました。地上に戻った火オリの命のほうのことは、私はよく知らないのです」
「それはそうですね、あなたはずつと海の中にいたのだから。では地上のほうのことは私がかいつまんでお話ししましょう。こんなふうに伝わっていますよ。」

とうとう一匹も釣れず、おまけに釣針をなくしてしまった火オリの命が家に帰ると、火照の命に、おい、釣りはどうだったんだ、オレのほうは山でさっぱりだったよ、やっぱり「餅は餅屋」だ、さあこのおまえの弓矢を返すから、オレの大事な釣り道具を返してくれ、といわれました。火オリの命は青くなつて釣針を失くした事情を話し、何度も詫言いました。ところが兄は許すどころか色なして怒り、いや釣針を返せ、返せ、返せと責めたてたんです。よっぽど大事な釣針だったのでしようか、それとも弟にいやがらせをしたんでしょうか。火オリの命は必死に自分の剣を砕いてそれでたくさん釣針を作つて弁償しようとしたのですが、兄は、だめだ、絶対にあの釣針でなければだめだ、と受け取つてくれません。

火オリの命は困り果てました。兄にはひどく責められる、でも失くした釣針は探しようがない、つらくてつらくて海辺に出て泣きました。その時助けの神が現れました。潮路をよく知る塩ツチの神です。その神がいったいどうしたのかと訊いてくれたので、命は事のしだい

を話しました。すると神はたちまち竹で編んだ小舟をこしらえて、それに命を乗せ、海神の宮に至る潮路を教えてくださいました。小舟はひとりでに進んでいき、火オリの命は教えのとおりに海神の宮に至りました。

というふうには聞いていたのですが、正しいでしょうか。それからの海神の宮でのことは鯛さん、またあなたからしゃべってもらえますか」

「はい、ありがとう、クエ彦さん。そこからなら私もしゃべれますよ。

えー、中つ国の火オリの命が海中の海神の宮にいらつしやつたことはですね、前代未聞のことでしたからすぐに海の中の生き物たちに伝わりました。

その折のことは私はこんなふう聞いています。なんでも、初め、火オリの命は神様らしく井戸のそばの神聖な桂の木にかつこよく登っておられたそうです。豊玉姫の女召使がそれを見つけ、姫に知らせたので姫が出てみると、それは気品のある麗しい若者でした。豊玉姫も海神の宮随一の美女です。二人は一目見かわすともう恋に落ちたそうですよ。（さつきも似たようなシーンがありましたね）。父親の海神も続いて出てきて、その麗しい若者が天つ神の御子であることをすぐに見抜きました。それで宮中に招き入れて、下にも置かず歓待しました。そして豊玉姫と火オリの命とを結婚させたのです。それ以来命は海神の宮で皆にかしづかれ、なに不自由なく幸せに暮らされました。その満ち足りたごようすは、私も宮に出入りする魚たちから洩れ聞いていましたよ」

鯛のそばで聞いていた海鼠が、

「ふしぎですね。火オリの命は釣針を探しに海神の宮にいらつしやつたんでしょう？ どうしてすぐに海神様にそのことを話して探してもらわなかったんでしょう？」

知恵のある白兔が、

「そこはボクはこんなふう思うのですが。火オリの命はそれまであまり幸せではなかったのかもしれない。山幸彦といいますが、毎日山を這いずりまわりながら獵をするのは楽ではありません。それに兄からはいじめられていましたからね。その命が海神の宮に行つて初めて幸せを見つけたのでしょう。それも楽園の最高の幸せを。神といえどもそれでは有頂天になりますね。それで一本の釣針のことなんかすっかり忘れてしまったのではないですかねえ」

「なるほど、兎さんの推測は一理も二理もあるようです。ありそうなことです」とクエ彦。

「でも私はこう考えているのですよ。やっぱりさかのぼる方式で、後のことの原因が先のこととで、先のことの結果が後のこととで、という理屈で、後で豊玉姫が命の子供を生みますね。

鶉茅茸アエズノ命。その命の子供の一人が神倭磐余彦の命、つまり初代天皇の神武、と皇統は続いていきます。だからさかのぼって、火オリの命は豊玉姫と結婚しなければならなかったし、海中の楽園でしばらく暮らす必要もあつたのではないですかね。いや、これはちよつと穿つた見方かもしれませんが。」

ああ鯛さん、お話はもう少し続きますね。鯛さんこそ心配ですよ。まだ喉に針が突き刺さったままですからね。はいどうぞ」

「ええ、その通り。私はといえば、そのせいでろくろくものも食べられず、身は細っていくばかり、ずっと苦しんでおりました。それが、三年ばかりも経ったところのある日のことですが、その時も私はふらふらと海の底をやっと這っていたのですが、仲間の魚たちが息せき切つてやって来て、口々に、海神様がおまえをお呼びだからすぐに宮殿に参上しろ、というのです。いったい何があったのかとわけを訊くと、こんなことでした。

その日、火オリの命がいつになく一つ深いため息をつかれたそうです。心配した豊玉姫が父親に告げると、海神様は命に、何か悩み事でもあるのですか、そもそもあなたは どうしてこの宮にいらっしゃったのですか、とお尋ねになりました。そこで命が先のしだいを一部始終語られたそうです。事情を知った海神様はすぐに大小の魚をたくさん召集して、「もしや、おまえたちの中に、三年前、こんな釣針を呑んだ者がいるか？」とお尋ねになった、そこで私を知る者たちがきつとその針を呑んだのは私にちがいないと申し上げたそうです。海神様はすぐにその鯛を連れてこいとお命じになりました。

私は急いで海神の宮に参上しました、といつてもますますふらふらになって死んでしまいそうでしたが。海神様の前で横たわって荒い息をついていますと、口を開けよとおっしゃったのでなんとか口を開けました。火オリの命と思われる方がのぞきこまれて、「これだ！この釣針にまちがいない！」と三メートルも飛び上がられました。そばにいた力の強そうな家来が私の口をさらに広げたので、針を取り出すために私はそのまま口を引き裂かれて殺されるんだと覚悟しました。その瞬間、往生際が悪いですが、あの時自分が呑みこんだのがいけなかったのだ、そんなに大事な釣針なのだから殺されてもしょうがない、自業自得だ、いや、でもやっぱり死にたくない、たとえ一生喉が痛くても生きてるほうがましだ、など、私の小さな脳の中でもあれこれ思いがかけめぐったものです。

ところが、そこはさすがに宮廷で、国随一といわれる呪術師が出てきて私の口にふれながらしばらく呪文を唱えると、ふしぎやふしぎ、どうしても抜けなかった釣針がぼろっときれいに外れたのです。私はまたまた九死に一生を得ました。

それから日を置かず、火オリの命は海神様の授けた宝の珠を携えて、ワニ鮫の背中に乗って中つ国へ帰っていかれました」

「ありがとうございます」とクエ彦。

「その後の中つ国でのことは、さつきも少しお話ししましたが、火オリの命はその宝の珠を使って兄の火照の命をさんざんにやっつけ、家来にしています。その後で産み時になったからとはるばる海神の宮から豊玉姫が出向いて、大きなワニ鮫の姿になって出産します。そうして生まれたのが鵜茅葺アエズノ命で、その命の子供が神倭磐余彦の命なんですね。やがて神倭磐余彦の命が日向を出て東へ東へと進み、紀ノ国の熊野から大和の国に入つてつ

いには畝傍の橿原の宮で即位され、大和朝廷の開祖の天皇となられたことは皆さんも聞いておられるでしょう。

さて皆さん、イザナキ・イザナミの神から始まった今日の話も、どうやら終わりに近づいたようです。拙い司会でしたが、皆さん、波乱万丈、一世一代、生きるか死ぬか、またはとっておきのお話を聞かせてくださってありがとうございます。

では最後に、少彦名さん、締めのお言葉をお願いします」

少彦名の神がそっと立ち上がった。

「クエ彦さん、ご苦労じゃった。皆さん、おもしろい話をたくさん聞かせてくれて感謝しますぞ。おかげでこの老いぼれも寿命が延びる思いがいたしました。私の言葉はたった一言。小さいことは大きいこと、大きいことは小さいこと。以上じゃ」

聞くと皆がその場でそれぞれに弾み、踊り、しぶきを上げ、叫んだ。空の日がめぐって、そろそろ常世の国にも宵闇が下りてくるようだった。